

029
359
1

色
の
り
え

完



027
559
1

愛知女子専
第 11844 號
圖書

11844
456



序

むく梵陀居之阿ふ序上くして人びからりそ
うへは多且世とふ新向小才そいひの燈れ
きめと強々しんと生死観念の冥悟をり
祈り出せば一白ハ万世の耳目をかゝるゝ
今と燈の文と多弓して小跡末社の神と
福まりこれと求念をものハ一白一章ありて
かりふ念記よの以無常迅速をりて



夏小者我氏本然子姑号雪暇を亭の長めいとゆ
なごしらも風誅のねいとねと津家乃奥旨飯
変定一寐て八月書の細いととり落てと
そりともとと階とたすくふじしや俳と俳と
去此不遠の境ととりて市中の二兩人と行そ
相実ひん事ハ蕉門の去来とあはくおそくは
一とせ之師更登氣とたてた候とかくてい
十六篇芭蕉扇述作
發白素方 跋撰ひ読まていへる小

そとゆへにむおとて吾門の十老七哲と呼まそ
我が堂うたてていふ俳又ありはれ鳴呼とれ
小長去くことあり事となりて去年の秋月
芭蕉花高くと忌月跋かすくして終ととり
きゆふを因と縁との不可思議をふくことや
孝子振筆子夫人の記を改て雪暇舎本然と
改名して病茶病床の吟と拾ひ又親とて
回門知己のくとり贈まはる芭蕉詠紙一帖

平とまのにき煙のゆく小片まゝて以て盡魂此
激突小傳んとなり秋風雅く二世のらきりまは
そつらまゝと序して去らふ乃に

雪中菴

明和六己丑年二月 藤太

病中遺行 亡人 本然

芥摘や露もあふく吾途に
七ととや大工堂の如くしき
花子小傳とくめばハ母なるや
一畝のくしきとえんや風くくけ
灰小伝とちやしの利小くをく分
名月やこころふくふ水たしへ

後引

菊の香返さうして花の香もあそん

林五月の訪ふ眺を

日くくしの里や枯野の行あしり

裏より人の許へうつりす

極くを去りゆくれはあそぶ

且井子一周

妻はのくまのなりやう

言はけてびくひあそぶや竹のうし

トウくく竹の影寐や去れ言

年内三巻

餅と子や支那のさうさう

歳暮の吟

赤 鞆 遊 灘 鈿

六十三章ハ病室の及古の中へ強ふり

拾くくまのまゝ小まうす

病後

解世の二さの事なりし寸志と也

三千日照常仰影

七十年空忽還源

清来空や心産くく阿弥陀仏

追悼歌仙并小序

祖翁一因忌の了証法師龍音
旁人の裾をつまみ納豆をくむ
有く以て之を本體龍音を忘る
納豆の苞を片んで香もくねと吐き
くくはたけをいけりん空くく今卒
十月むらむ川の花を風とてはふれ
雲の夕日氣く忽を源の一日とてふ
涙の朽葉と象袖と結くぬれ古事の

志まやし祿ハ初吉の祿を設る替

君叟を并舎て折して

振警改

納豆や苞もくくこれかき夜 本然

むくやうり小松去くま月 葵太

山鳥山道くはく畑荒て 全

人芝福の貝に追く 然

者向く菊く舎葺の故亦 全

扇も並はいと下ヤとハ 太

ク

柳徑乃汗を服丁る毎毎うろ 太

亥桂くく来り朝小くくを 然

鳴川と決まぬ虫縁持つて人 太

己とと紙子の意の怪り共 然

踏もや一扇ぬも若れが去やう人 太

沙灯くくくは来のうり鴉 然

米備分日も骨朋く茶うりく 太

旅去芝店の馬ハあましも 然

裸子花のさかぬ風呂にまよふ

うりて紅くく花の夕景 然

月細くみまゆふれをくれ 太

いとよまのさか肥か前 然

かくまぬこ一か措のさかみ 全

使若も脈はて昔ふお付 太

掌へまゝくちまにその日され 然

ろろ少付も尻後ハ三才 太

索顔も是をさりやふれ音 然

喉りぬそと竹婦人なり 太

指南に、くく睡の列女傳 然

忠度町の荒てりをく 太

まくとゆら初尾と師の茶屋を 然

け巻敵と聖日れねの月 太

響た波をそとにまゆく寸 然

さく一志より喜いむけり 田 太

+

耳よりぬ本草ありと連きて 太

ふまきの布れ足さく（歌） 然

閑のすもゆの帯目のまきこく 全

橘表片くも照日曇る日 太

幸くくたまむけのた乃相取あり 今

あまも降去れむくすの葉 執筆

至元居士追悼

海通言二縁空世道さく

遊出一の滝れあまり、啼ちとり 尼優

山茶む乃人候、心答く礼 恭桂

あゝ惜や病く打ふる水伝む 万樹

休やふふと小差のうそ 眠我

き菊やあま今を我をむけ 夷角

極楽へらゆや老木のうへ 弄蝶

あゝ雲や夕の借のうへに花
松葉のくさくさ今やを牡丹
ひきふてくさくさ花根のた

如凡
山幸
求光

色もくさくさ内面の月乃歌
相傘も昔より今も去くま
そ人ささゆふ花ひり各花月
あゝ一軒や草う花ま袖の露

嵐亭
人た
雷堂
吐月

あゝふと眩暈の熱さ涙うね
なまなく眉小まなく衣袂のりぬ

六窓
葵太

